



おいさと笑顔がつどう
みなとまち塩竈

東日本大震災
復旧・復興の記録

あしたへ

明日へ

市民版



宮城県塩竈市

2011・3・12

新たな始まりの朝から。

この写真は、平成23年3月12日の早朝、

市内で写真館を営んでいた大友文雄さんが

避難先である第一中学校から撮影したものです。

不安で眠れない一夜を過ごし、迎えた朝、

カメラを通して塩竈の街や人々を見つめてきた大友さんが撮った一枚。

それは、「みなとまち塩竈」と感じられる風景でした。

津波の被害を受けたマリングेट塩釜、

雪が積もった家々の屋根、

海上保安庁の船が浮かぶ港。

いつもと同じように朝日が街と港を赤く照らし出していました。



大震災は街を破壊し、

大切な生命を、生活の基盤を奪っていきました。

しかし、そのような惨事のさなかでも、

多くの塩竈市民がこの写真館主のように

「未来」が来ることを信じ、

「長い間住み慣れた土地で、安心した生活をいつまでも送りたい」と願い、

この日を新たな始まりの日と胸に刻んで、前を見据えていました。

私たちは今、思い出します。

塩竈の人々が、太古から繰り返し災いに見舞われながらも、

そのたびに未来を信じて前進を止めなかったことを。

その歩みの堆積が、塩竈に繁栄をもたらしてきたことを。

東日本大震災から4年。

立ち上がり、前に進む塩竈のこの瞬間の姿と想いを、

未来の塩竈の人々のために、

ここに記します。

塩竈市東日本大震災復旧・復興の記録 明日へ

2011.3.12 新たな始まりの朝から……………1

塩竈市の被災状況について……………2

地域の浸水範囲と浸水深……………4

本土地区の被害状況……………6

浦戸地区の被害状況……………8

塩竈へのエール……………10

〈おがま文化大使・おがま産業大使の方々から
〈広がる地域間交流の輪……………12

全国から塩竈市へ
職員を派遣していただいた地方自治体・機関……………14

3.11から約4年間の記録……………16

塩竈市東日本大震災記録誌作成事業
関連ワークショップ……………24

東日本大震災の反省と明らかとなった課題……………32

防災・減災力の強化 ―震災後約4年の成果―……………33

「塩竈市地域防災計画」の改訂
〈震災の経験と教訓を次の災害への確かな備えに……………34

3.11 現在・未来……………36

塩竈市長 佐藤 昭……………36

塩竈市の被災状況について

【東日本大震災の概要】

- 地震名／東北地方太平洋沖地震
- 発生時刻／平成23年3月11日 午後2時46分18秒
- 震源／三陸沖（牡鹿半島の東南東約130km付近）
- 震源の深さ／24km
- 規模／マグニチュード9.0
- 最大震度／7（栗原市築館）

【塩竈市における震災の概要】

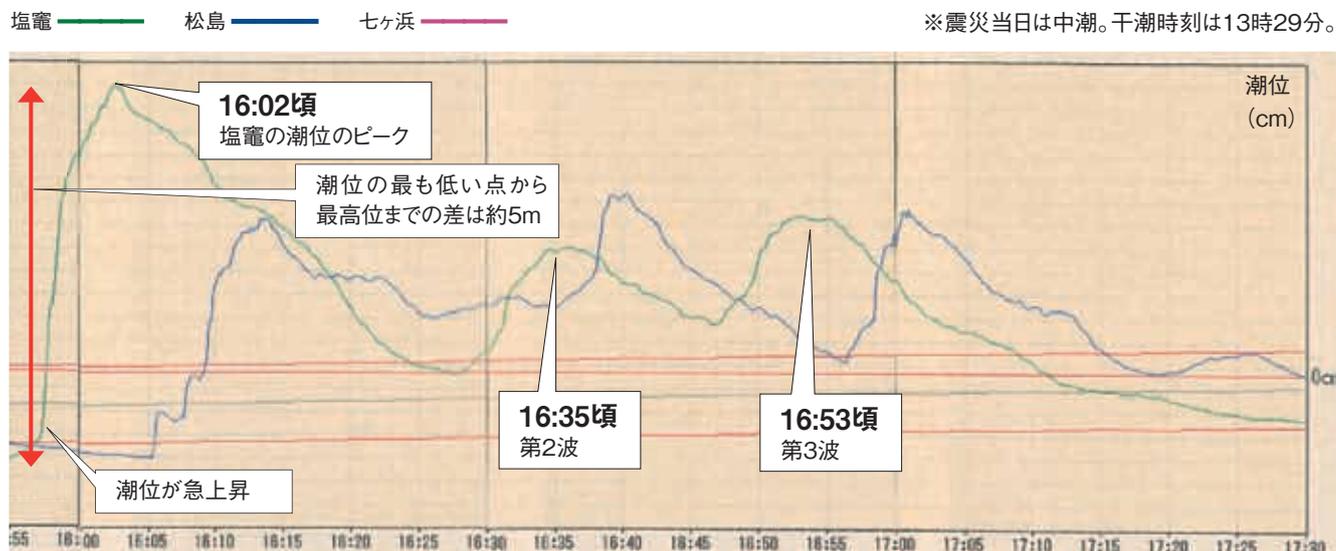
- 最大震度／6強
 - 津波の到達時刻／午後3時15分（引きはじめ） ※塩釜港西埠頭観測 ※地震発生後約30分
 - 津波の高さ／4m（津波波高・塩釜港西埠頭の潮位計が計測した津波の高さ） 午後4時02分
 - 最大浸水高／本土T.P.4.8m（宮城県土木部調べ）※1 ※2
 - 最大浸水高／浦戸地区（参考値）T.P.8.5m（宮城県土木部調べ）※1 ※2 ※3
- ※1…浸水高／陸上での津波の高さ。建物等に残った水跡から測定
 ※2…T.P.（東京湾平均海面）…東京湾の海面高。全国の標高の基準となる
 ※3…浦戸諸島に近く、外洋に面する東松島市宮戸島月浜海水浴場付近の浸水高
- 大津波警報／11日午後2時49分
 - 津波警報へ切替／12日午後8時20分
 - 津波注意報へ切替／13日午前7時30分
 - 津波注意報解除／13日午後5時58分

1. 人的被害

東日本大震災では、市民の方47人が津波の犠牲になり、また18人が関連死と認定され、合わせて65人の方がお亡くなりになりました。その内訳は、次のとおりです。

- 市内で亡くなられた市民／17人（本土…14人、浦戸…3人）
- 市外で亡くなられた市民／30人

※震災当日は中潮。干潮時刻は13時29分。



3. 避難所および避難場所の運営状況

月日	避難所開所数 (箇所)	避難者数	備考
平成23年3月11日	39	8,047	
3月12日	46	8,771	(最大)
4月1日	6	770	
5月1日	5	333	
6月1日	4	100	
7月1日	2	41	
7月13日	避難所閉鎖		

※避難所の避難者数の推移は p.62 を参照

2. 住家などの被害 (平成 27 年 1 月現在)

(単位：棟)

津波	種別	全壊	大規模半壊	半壊	一部破損	計
	住家	478	1,099	392	266	2,235
非住家	290	714	251	87	1,342	
地震	種別	全壊	大規模半壊	半壊	一部破損	計
	住家	194	356	1,431	6,727	8,708
非住家	55	71	234	688	1,048	
計	種別	全壊	大規模半壊	半壊	一部破損	計
	住家	672	1,455	1,823	6,993	10,943
非住家	345	785	485	775	2,390	
合計		1,017	2,240	2,308	7,768	13,333

4. 被害金額の状況 (平成 25 年 4 月現在)

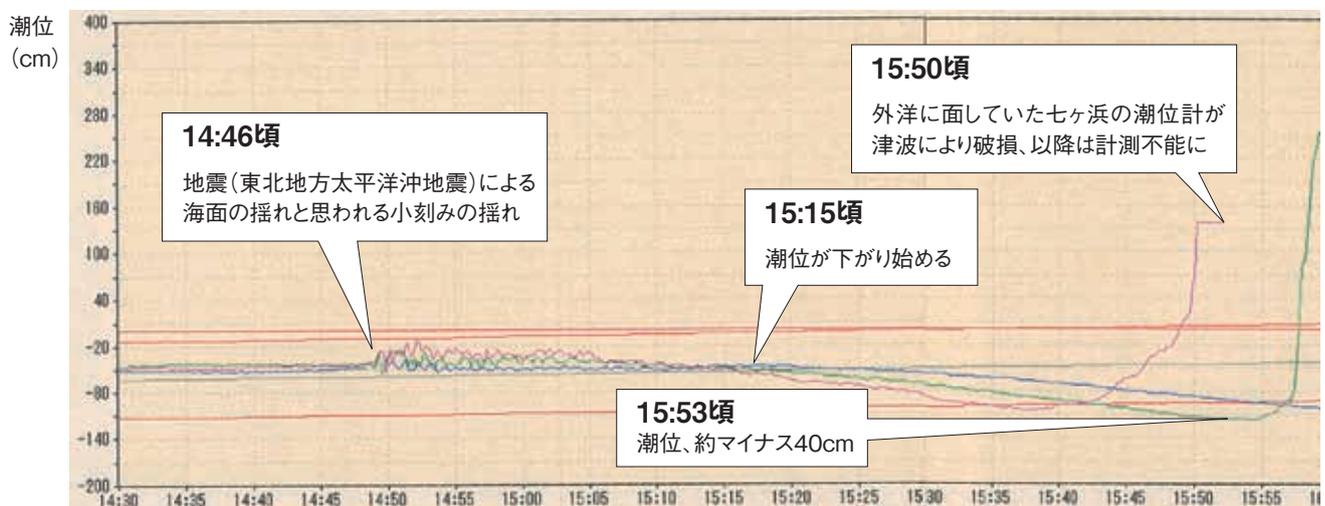
(単位：千円)

項目	被害金額	内訳
交通関係	25,141	市営汽船等
ライフライン施設	933,400	水道、都市ガス、通信・放送施設
保健・医療福祉関係施設	447,689	医療機関、民間保育、保健センター、児童館等
建築物	61,277,613	被災建物
民間施設等	12,800,000	工業関係、商業関係
交通基盤施設	16,651,574	道路・橋りょう、港湾施設、下水道施設、その他公共土木施設等
農林水産関係	27,792,949	共同利用施設、塩釜漁港施設等
文教施設	210,977	県立・市立学校、その他文教施設
文化財	5,825	市指定文化財等
廃棄物処理・し尿処理施設	98,918	清掃工場
その他の公共施設	1,397,920	観光施設、消防・防災施設、警察関係施設等
合計	121,642,006	

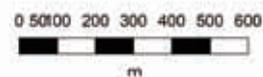
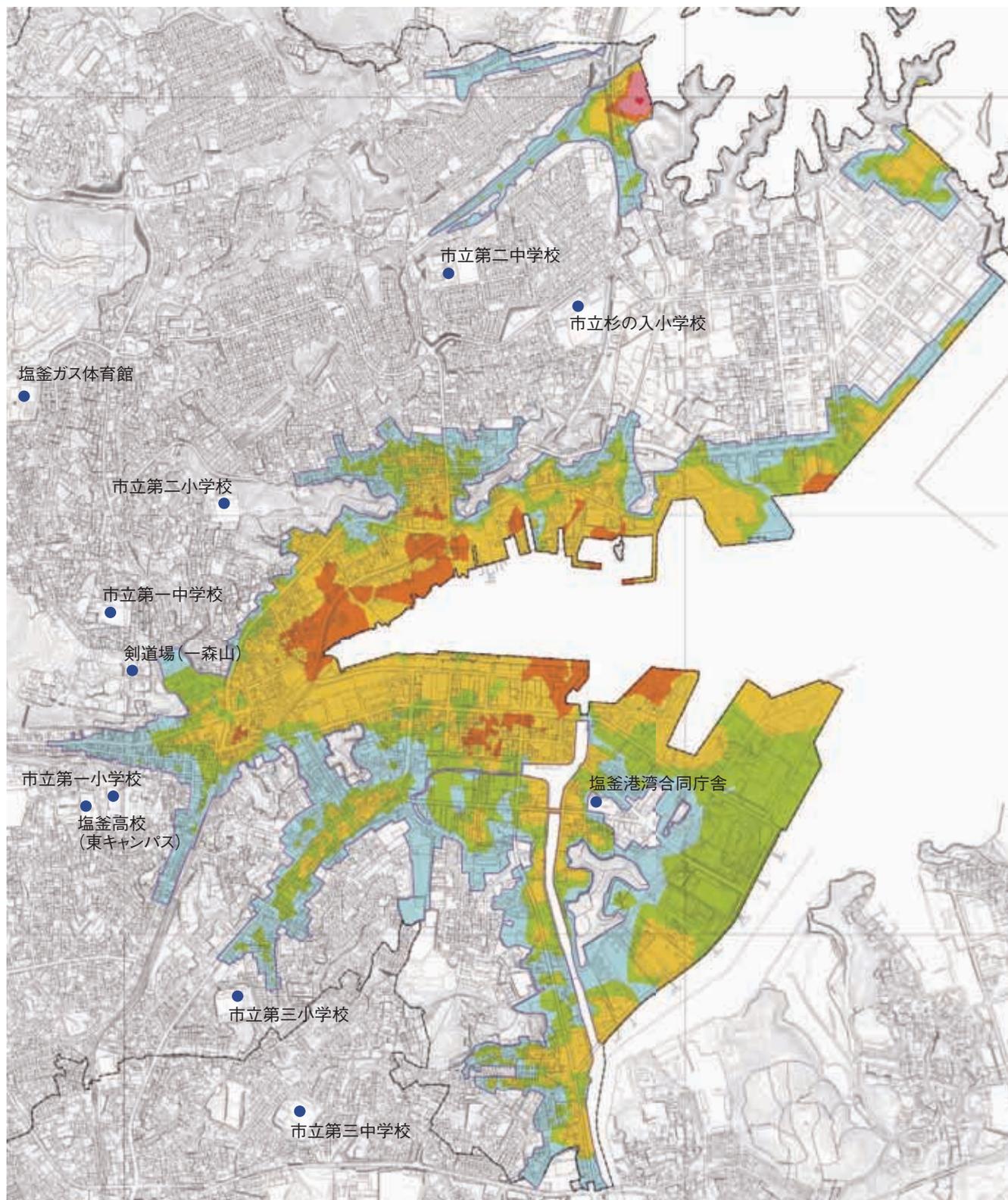
※直接的な被害金額を集計したもの。

【塩竈、松島、七ヶ浜の3カ所に設置された潮位計の記録】

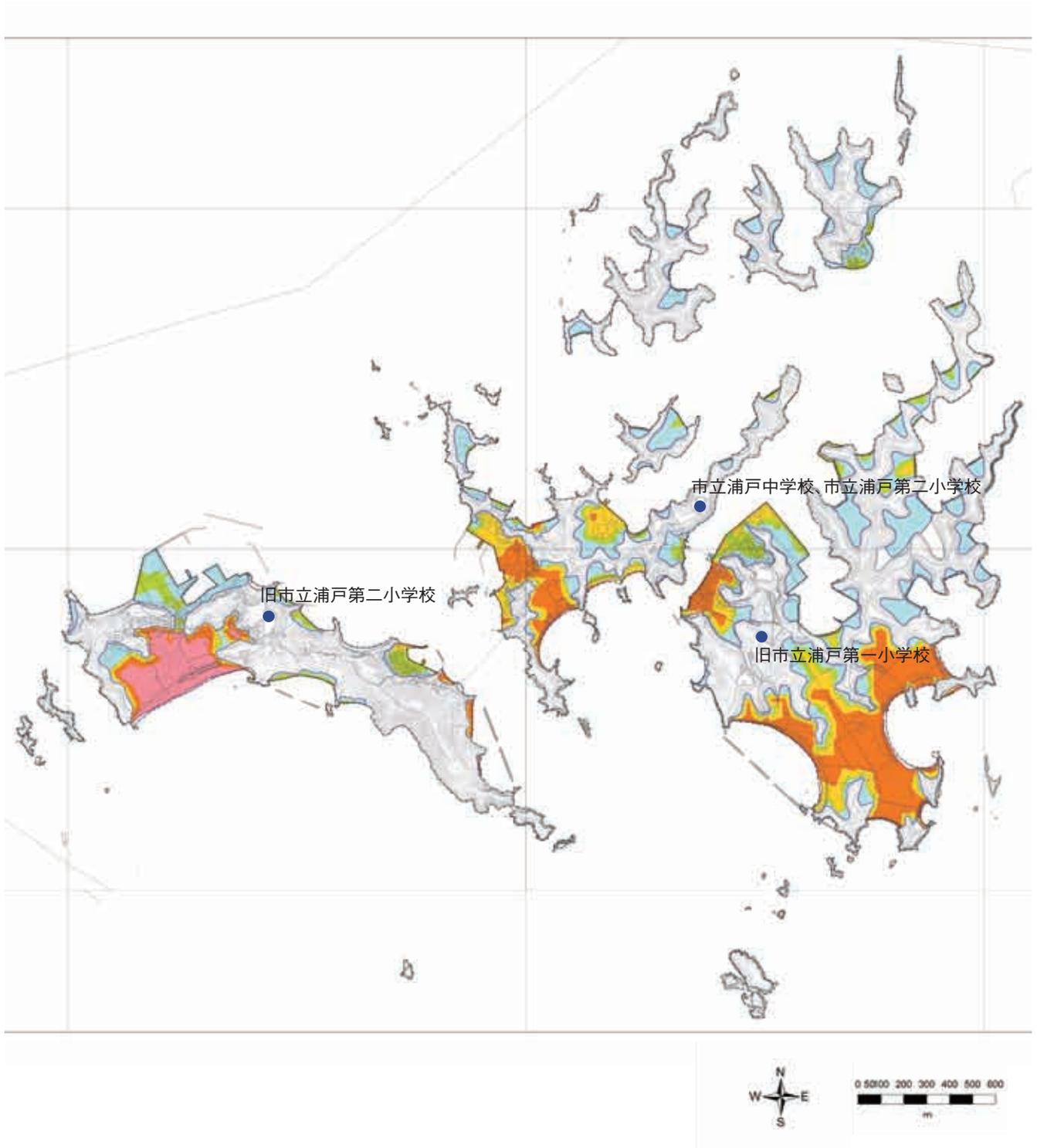
塩釜港(西埠頭)での潮位のピークは16時3分頃であり、直前の最も低い潮位との差は4mありました。



[市域の浸水範囲と浸水深 (本土地区)]



[市域の浸水範囲と浸水深（浦戸地区）]

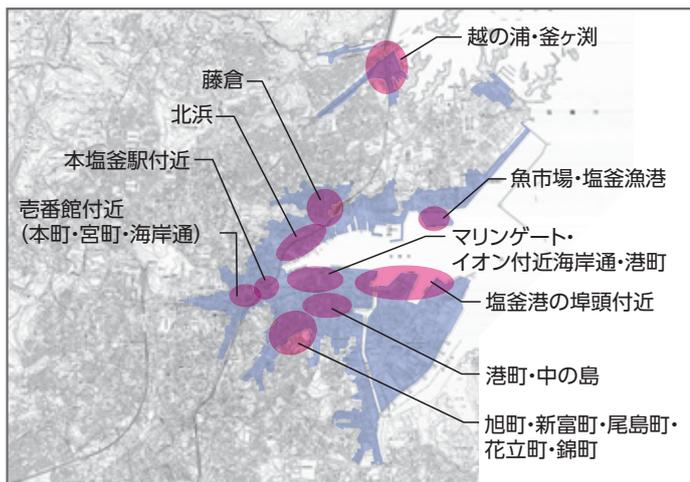


浸水深-浸水区分 (T.P.)

 8.0m～	 1.0m～2.0m以下
 4.0m～8.0m以下	 0.5m～1.0m以下
 2.0m～4.0m以下	 0.5m以下

平成23年度 国土交通省都市・地域整備局
「東日本大震災による被害現況調査業務(宮城5) 報告書」および
塩竈市市民総務部税務課固定資産税係「東日本大震災の津波
における課税免除区域図」から市域の浸水範囲を図表した。

本土地区の 被害状況

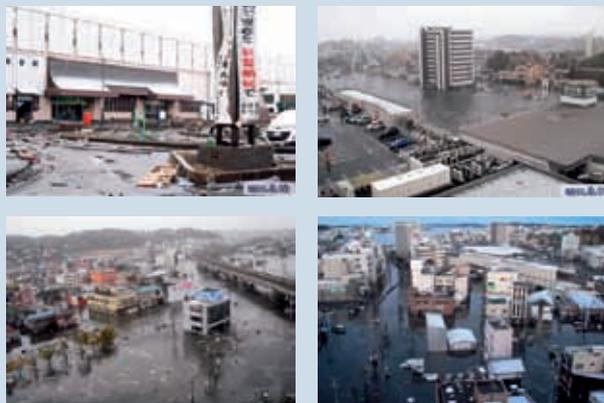


■塩竈市ホームページ
 トップページ⇒震災関連情報
 ⇒被災写真・動画
<http://www.city.shiogama.miyagi.jp/seisaku/shinsai/shashindoga-index.html>

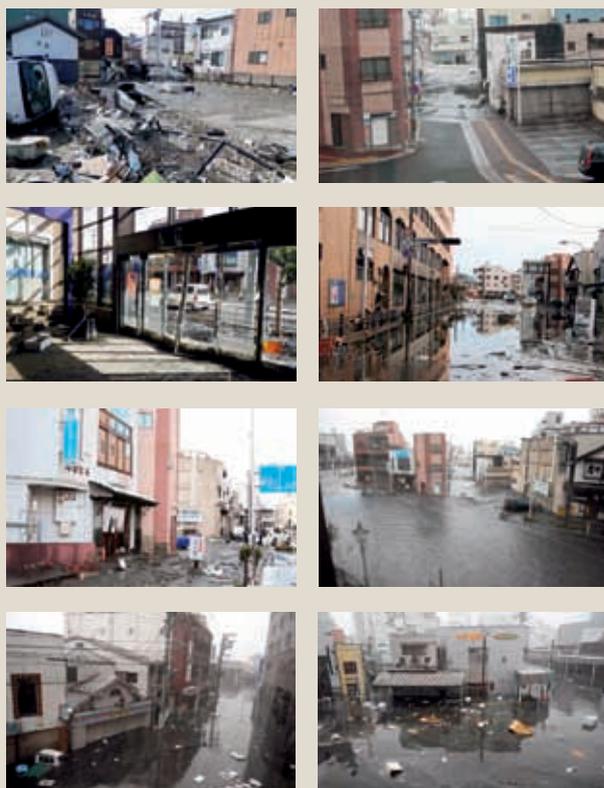
藤倉



本塩釜駅付近



壺番館付近 (本町・宮町・海岸通)



北浜



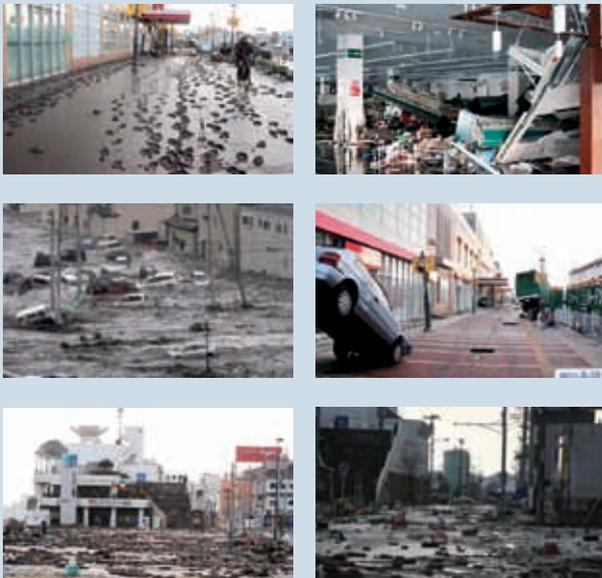
旭町・新富町・尾島町・花立町・錦町



塩釜港の埠頭付近



マリゲート・イオンタウン付近海岸通・港町



魚市場・塩釜漁港



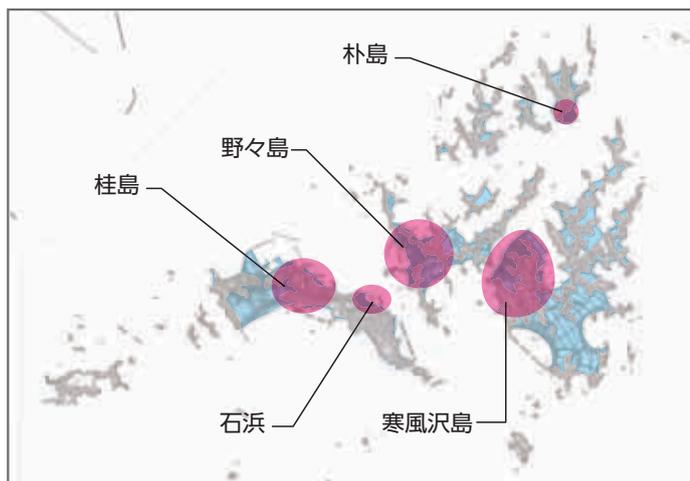
港町・中の島



越の浦・釜ヶ渕



浦戸地区の 被害状況



■塩竈市ホームページ
トップページ⇒震災関連情報
⇒被災写真・動画
<http://www.city.shiogama.miyagi.jp/seisaku/shinsai/shashindoga-index.html>

桂島



朴島



石浜



野々島



寒風沢島



塩竈へのエール

しおがま文化大使・しおがま産業大使の方々から

塩竈市は市民の皆さんの努力はもちろん、国内外のたくさんの方々からのご支援・応援を受けて、復興への道を進んでいます。

本誌を作成するに当たり、塩竈市にゆかりのある

「しおがま文化大使」「しおがま産業大使」の方々からも力強いメッセージを頂きましたのでご紹介します。



しおがま文化大使

板橋 恵子さん

ラジオパーソナリティー
塩竈市再生委員会委員

マイナスからプラスは生まれる

広報しおがまに掲載されていた「震災の恩返し」広島県に義援金の記事にうれしくなりました。杉の入小学校の児童会が中心となって、広島の子供たちに対する募金活動を行ったというもの。「自分たちが受けた支援に、気持ちを感じたかった」「広島の人たちが少しでも楽になるように」と。

心と体で受け止めた、あの震災の過酷な体験から、子どもたちは多くのことを学んだに違いありません。「マイナスからプラスは生まれる」。彼らの思いは、塩竈をさらに魅力ある街にしてゆく大きな力になってゆくことと思います。



しおがま文化大使

菅野 潤さん

ピアニスト

皆で力を合わせよう

震災以来、塩竈市民の皆さんは、佐藤市長以下一つとなつて復興にあたり、その連帯と団結はめざましいものがあります。

これからも、歴史ある港町としての特色を生かして産業と文化を振興させ、さらに訪問客を引き寄せる魅力ある都市として塩竈が発展するように、皆で力を合わせようではありませんか。

私も微力ながら、平成27年春に立ち上げる「しおのまちな音楽祭」などの活動を通じてその一翼を担うことができ、と思っています。



しおがま文化大使

平間 至さん

写真家

新しい希望に向かって

震災の翌年から毎年 GAMAROCK を開催させていただき、昨年から塩竈は新しい段階に進んだのではないかと感じていました。

私自身もいつまでも故郷の悲しみの中で生きていくわけにはいかない。そんな気持ちを前向きな力に変えていく時期が来たのではないのでしょうか。塩竈のみなさんと共に新しい希望に向かっていきたいと思っています。



しおがま文化大使

畑中 みゆきさん

冬季オリンピック2大会連続出場
NPO High Five 代表
一般社団法人アスリート会議理事

私ができる塩竈への恩返し。

私の人生で一番大きく変わったのが、東日本大震災・・・そして、震災で亡くなった叔父の死。

あれから4年が経とうとします。震災後、塩竈に戻り、復興支援活動を行い改めて塩竈の良さを知りました。

塩竈に生まれ、塩竈に育つて、馴染み深く、誇りに思っています。この美しく美味しい街「塩竈」に、未来を担う子供達が「美しい塩竈に生まれ育って良かった、大人になっても、塩竈に住みたい、子供を連れて、船に乗り島へ渡る」と思えるような、活動を行っていくこと。それが、二度のオリンピック経験を生かし、私ができる塩竈への恩返しです。



しおがま文化大使

山寺 宏一さん

声優、俳優

長く永く応援して行きます！

生まれ育った塩竈が大好きでしかたない！
塩竈に帰って友人達と語り合いながら飲む酒が
旨くてたまらない！
塩竈の皆さんが、街が、元気なのかどうか
気になってしょうがない！

震災以降、復興の為に必死で頑張る塩竈の方々の姿を、
自分なりに見て来たつもりです。

しおがま文化大使としてまだ何も出来ていない僕ですが、
長く永く応援して行く事を誓います！



しおがま文化大使

本間 秋彦さん

テレビ・ラジオ
パーソナリティー

フラッグシップとして

私の実家があった故郷牡鹿半島鮎川浜は大半の住居を含
め観光機能・漁業機能・商業機能のほとんどを津波で流失し、
雑草が生い茂った風景からはかつての様子が想像し難くな
りました。ほとんどの沿岸地域がそのような現状だからこ
そ、塩竈のめざましい復旧は未だ先の見えない被災市町に
活力と光明を与えるものであって欲しいと願います。

百年先に繋がる市政と百年先まで語り継がれる至誠のた
めに今後塩竈市が果たす役割は重要です。

塩竈がフラッグシップとなり今後被災地域全体の復旧・復興
が加速するよう、文化大使としてその一助になれば幸いです。



しおがま文化大使

鶴田 美奈子さん

ピアニスト&チェンバロ奏者

勇気をいただきありがとうございます

塩竈に帰るたびに、東日本大震災からの復興が目に見え
て進歩しているのが分かります。

普段ドイツという塩竈から遠く離れた所にいると心配ば
かりが募るのですが、塩竈の人たちの前向きさに、かえっ
て私の方が勇気づけられます。

今、世界中で気象災害やウィルスの蔓延など、人間の力
では解決が困難な問題が多発しています。東日本大震災か
ら復興に向けて立ち向かい、一歩ずつ克服している姿を世
界中に示している、それが故郷塩竈の人たちであるという
ことに、私は強い誇りを持たずにはられません。



しおがま産業大使

佐藤 宏毅さん

宮城県自動車産業アドバイザー

知恵と情熱を結集して

未曾有の震災から4年の時が流れました。

復興への、尊厳や強さを失わないひたむきな取り組みには世
界中の人々が尊敬と称賛の念を持って支援してくれています。

震災から得た数多くの知見を活かし、目覚ましい技術革新
を取り込みながら計画的に二つとつ、知恵と情熱を結集して取
り組んでいくことにより次世代の塩竈が実現できると信じてお
ります。

「おいしさ笑顔がつどうみなとまち塩竈」を世界に向けて
発信していけるように、明るく楽しく元気よくチャレンジしてい
きましょつ。



しおがま産業大使

小野 金夫さん

タイハウグループ創業者
会長

塩竈に、自信と誇りをもって

塩竈を離れ、愛知県名古屋市中で事業を起こしてから長い
年月が経過しますが、ふるさと塩竈を思う気持ちには強い
ものがあります。

震災前から、私なりにまちづくりや母校の中学生を対象
にした研修での人づくりに協力してまいりましたが、震災
後、塩竈に何度も足を運び、まちの姿を自分の目で確かめ
ながら、復興のお手伝いをさせていただきました。

その一環として、被災した市民の皆さまの心を癒やし、
再生への励みになればと考え、平成25年8月に塩竈市遊ホ
ールで塩竈市復興祈願「愛のコンサート」を主催し、また、
しおがま産業大使として、事業経営の中で培った経験に基
づいて、震災後のまちづくりに向けたアドバイザーを行って
まいりました。

復興の道のりは険しいと思いますが、市民の皆さまが、
豊かな歴史と文化に恵まれた塩竈で、自信と誇りをもって、
いつまでも安心した生活を送れるようになる日が、少しで
も早く到来しますことをお祈りいたします。

全国から寄せられた支援への感謝

広がる地域間交流の輪



千葉県千葉市



東京都渋谷区



山形県村山市



長野県岡谷市



神奈川県横浜市



長野県長野市



富山県射水市



富山県魚津市



長野県須坂市



愛知県みよし市



愛知県碧南市



愛知県名古屋市



三重県伊勢市



三重県名張市



岐阜県各務原市



福井県越前市



福井県敦賀市



福井県福井市



兵庫県養父市



兵庫県高砂市



京都府京都市下京区



沖縄県南城市



沖縄県糸満市



岡山県倉敷市

支援への感謝の気持ちとともに全国へ

■支援をいただいた自治体の催事への出展

平成 24 年度	8月4日	元気ッス！へきなん	愛知県碧南市
	8月25日	京都駅前夏まつり	京都府京都市下京区
	8月26日	むらやま徳内まつり	山形県村山市
	9月30日	むらやま商工まつり	山形県村山市
	9月30日	磯子まつり	神奈川県横浜市磯子区
	10月6日	おかやフェスティバル 2012	長野県岡谷市
	10月14日	善光寺表参道秋まつり	長野県長野市
	10月28日	横浜市場まつり 2012	神奈川県横浜市神奈川区
	11月3日	青葉区民まつり	神奈川県横浜市青葉区
	11月3日	信州むしくらまつり	長野県長野市
	11月9日	東北六県大物産展	愛知県名古屋市長
	11月10日	うまいもん祭り	長野県須坂市
	11月10日	YABU2012 マラソン&フェスティバル	兵庫県養父市
	11月10日	塩竈観光物産展 in 名張市	三重県名張市長
	12月2日	伊勢志摩物産展	三重県伊勢市長
	2月24日～25日	東北観光物産展 & 夢の桜街道パネル展	東京都新宿区西口
	3月24日	蔵のまち須坂銀座通り春まつり	長野県須坂市長
平成 25 年度	4月7日	南区桜まつり	神奈川県横浜市南区
	7月27日	元気ッス！へきなん	愛知県碧南市長
	8月3日	観光物産展 IN やぶ	兵庫県養父市長
	8月24日	京都駅前サマーフェスタ 2013	京都府京都市下京区
	8月25日	むらやま徳内まつり	山形県村山市
	9月21日	とやまグルメランド IN うおづ	富山県魚津市長
	9月21日	日本丸メモリアルパーク横浜音まつり	神奈川県横浜市
	9月23日	AOYAMA GREEN FESTIVAL	東京都渋谷区
	10月6日	むらやま商工まつり	山形県村山市
	10月13日	千葉湊大漁まつり	千葉県千葉市長
	11月2日	うまいもん祭り	長野県須坂市長
	11月3日	信州むしくらまつり	長野県長野市長
	11月4日	たけふ菊人形展	福井県越前市長
	11月9日	福井駅西口マルシェ	福井県福井市長
	11月10日	碧南市民フェスティバル	愛知県碧南市長
	11月17日	至極の逸品くらしきフェア	岡山県倉敷市長
	11月23日	射水市農業産業まつり	富山県射水市長
11月30日～12月1日	三重の魅力・名張元気フェア	三重県名張市長	
3月23日	蔵のまち須坂銀座通り春まつり	長野県須坂市長	
平成 26 年度	4月6日	南区桜まつり	神奈川県横浜市南区
	5月31日～6月1日	高砂市「ご当地博」	兵庫県高砂市長
	7月26日	元気ッス！へきなん	愛知県碧南市長
	8月23日	豊かな海づくり大会	沖縄県糸満市長
	8月24日	塩竈市物産展	沖縄県南城市
	8月24日	むらやま徳内まつり	山形県村山市
	9月21日	ふくい秋の収穫祭り	福井県福井市長
	9月23日	AOYAMA GREEN FESTIVAL	東京都渋谷区
	10月11日	第28回楽楽市	長野県岡谷市長
	10月12日	むらやま商工まつり	山形県村山市
	10月25日	つるが観光物産フェア	福井県敦賀市長
	11月1日	うまいもん祭り	長野県須坂市長
	11月2日	産業フェスタみよし 2014	愛知県みよし市長
	11月3日	信州むしくらまつり	長野県長野市長
	11月3日	養父市市制10周年記念式典・イベント	兵庫県養父市長
	11月8日	かがみはら産業農業祭	岐阜県各務原市長
	11月16日	至極の逸品くらしきフェア	岡山県倉敷市長
11月29日	技能五輪全国大会	愛知県碧南市長	

塩竈の魅力为全国の方々に

■「しおがまの復興と観光を知る！旅」の催行

平成 24 年度	11月14日・15日	長野県須坂市長
	11月26日・27日	愛知県碧南市長
平成 25 年度	11月16日・17日	兵庫県養父市長
	11月24日・25日	長野県長野市長



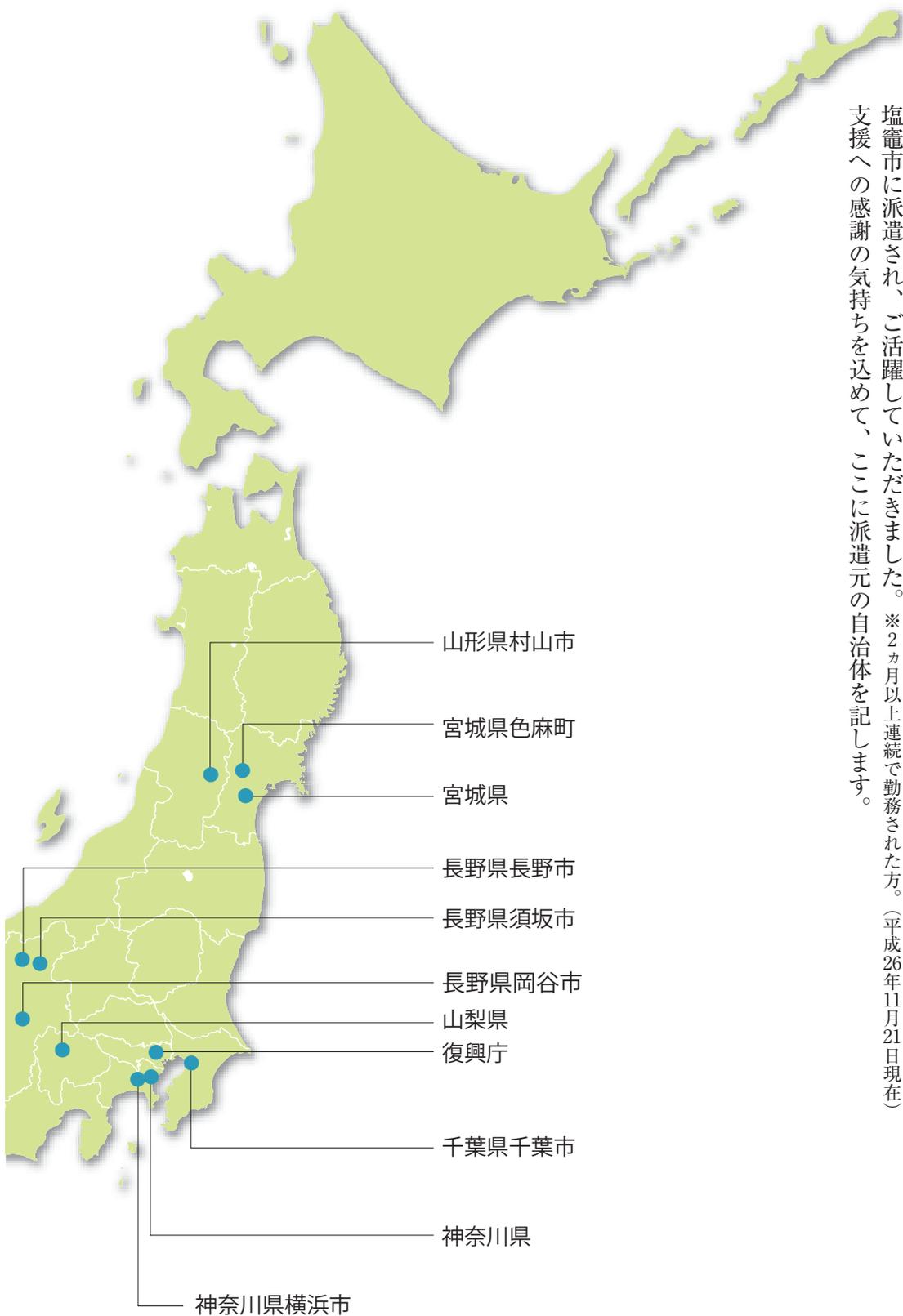
須坂市の皆さん



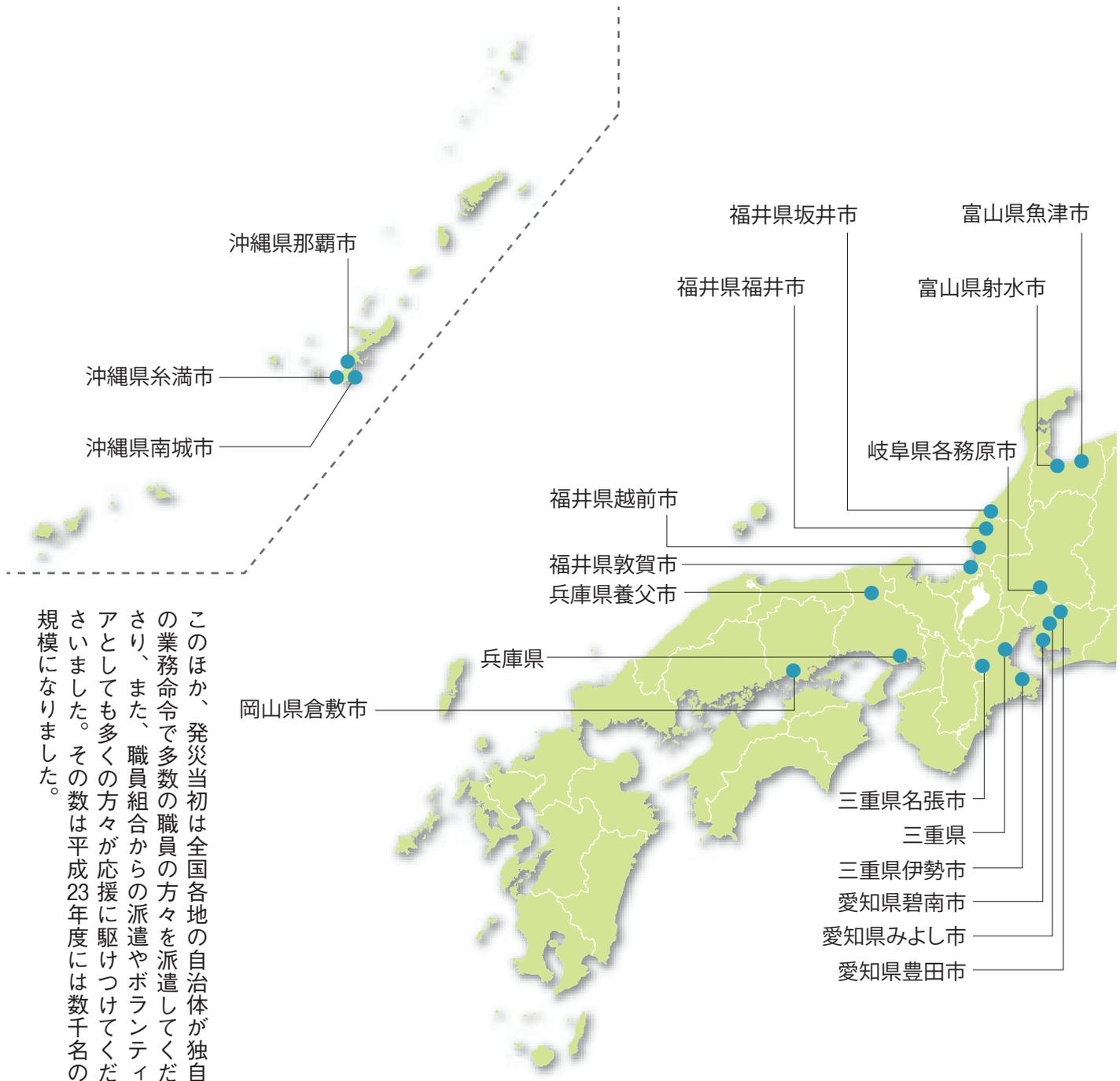
長野市の皆さん

全国から塩竈市へ 職員を派遣していただいた 地方自治体・機関

東日本大震災の復旧・復興のため、
これまでに全国の地方自治体など30団体から総計1334名の職員の方々が
塩竈市に派遣され、ご活躍していただきました。※2ヵ月以上連続で勤務された方。
支援への感謝の気持ちを込めて、ここに派遣元の自治体を記します。
(平成26年11月21日現在)



塩竈市東日本大震災モニュメントの「時の緑石」



このほか、発災当初は全国各地の自治体が独自の業務命令で多数の職員の方々を派遣してください、また、職員組合からの派遣やボランティアとしても多くの方々が応援に駆けつけてくださいました。その数は平成23年度には数千名の規模になりました。

《震災発生と初動期の対応》

想定外の事態に直面して

塩竈市災害対策本部の設置

けたたましく鳴り響く緊急地震速報、その後の長い揺れが、時に激しく庁舎を揺さぶりました。防災安全課（現・市民安全課）に設置されていた地震計が示したのは「震度6強」。かねてから予想されていた「宮城県沖地震」の発生か？直ちに全職員が対象の「3号配備」が敷かれ、塩竈市災害対策本部が設置されました。

《避難所（本土地区）》

最大避難者数 8771人

想定以上の2倍以上の市民が避難所へ

「宮城県沖地震、今後30年以内の発生確率は99%」。震災前、県が行った宮城県沖地震の「第三次地震被害想定調査」による市内の避難者数は3158人。その備えは十分にできていたはずでした。しかし、未曾有の規模となった大震災の避難者数は、想定をはるかに上回りました。



野々島に襲来した津波

《浦戸》
あの日、《自然の防波堤》となり、津波から本土地区を守った島々。島々に暮らす人々は、それゆえに甚大な被害を受けました。



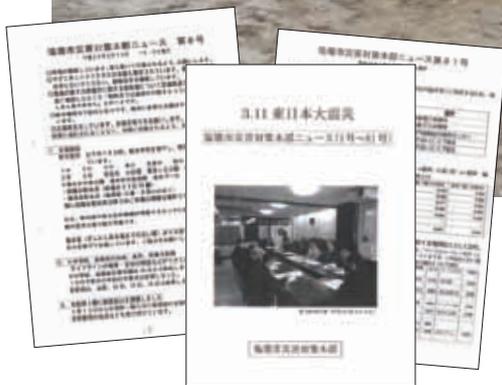
地震の被害



平成23年3月16日、浦戸中学校・浦戸第二小学校避難所（野々島）にて



避難所に集まった市民（第二小学校）



3月13日から発行された塩竈市災害対策本部ニュース

発災直後は、臨時災害放送局「しおがまさいがいエフエム」から避難している市民に向けた呼び掛けも行いました（写真提供：BAY WAVE）

《震災発生と初動期の対応》

関係機関の強力な支援

消防・警察・自衛隊・保安本部

震災直後から関係機関の多くの方々のご支援をいただきました。



自衛隊による救命救急と復旧・生活支援の空輸



浦戸での復旧活動

《上水道》

全市断水からの復旧

16日目に本土地区通水完了

明治45年に宮城県内初の近代水道として始まった塩竈の水道事業。

時代とともに水道施設が拡充され、さまざまな災害対策がとられてきました。

しかし、震度6強の地震と大津波は、それらの備えをはるかに上回り、約100年にわたる歴史の中で2度目となる「全市断水」をもたらしました。



破損した鋼管の溶接作業

給水に並ぶ市民



《医療機関》

市民の健康と生命を守る

震災以降3月中の救急受け入れ件数は163件

平成21年から「病院改革プラン」に取り組んでいた塩竈市立病院。医療設備の損傷とライフラインの途絶、診療体制の制限…。「住民の健康と生命を守る」との思いの下での全職員一丸となつての対応。震災経験は、病院の使命をあらためて意識、再確認させました。

《陸上交通》

人と物の動線の確保

復興の一環として進む道路整備

震災で大きな被害を受けた市内の陸上交通網と交通機関。市を南北に貫く幹線道路の国道45号は数カ所で通行不能となり、救助や復旧のための人員、物資の移動に支障をきたしました。幹線道路の通行確保が、復旧活動の第一歩でした。



震災翌日から始まった応急復旧活動



病院災害対策本部平成23年3月12早朝

水道部からの給水



《災害廃棄物処理》

がれき処理から始まった 復旧の第一歩

「家庭ゴミ収集は生活衛生の維持のため継続

倒壊した建物や構造物が路上に散乱。
津波ではがれきや車両、船舶が拡散し、ヘドロなどが堆積。
塩竈市と宮城県によって処理された災害廃棄物等の総量は約
24万8600トン。
震災前年の10倍以上という災害廃棄物の撤去・回収、
適正な処理は、復旧・復興に不可欠の課題でした。



中倉埋立処分場



膨大な災害廃棄物は市と宮城県で処理

《海上交通》

よみがえった浦戸地区の生命線

「塩竈市営汽船の復旧・復活

本土と浦戸諸島を結ぶ
海上交通の生命線。
浦戸住民や観光客の足、
復旧・復興に欠かせない
大きな支えであり、
早期の運航再開が望ま
れました。
「塩竈―朴島」間の運航
再開は平成23年6月1日
でした。



平成26年創業70周年を迎えた市営汽船



待ち焦がれた運航再開は3月26日の「塩竈―石浜」間

《下水道》

より水害に強い塩竈を目指して

「下水道の復旧と整備

震災では市街地や沿岸部を中心に
甚大な被害に見舞われました。
震災前から取り組んできた
「水害に強い塩竈」の実現に向けて、
災害復旧工事と並行して、
津波浸水地域では
雨水対策を目的とした事業も
進めています。



「水害に強い塩竈」
目指し、下水道整
備を継続的に実施



《議会（市議会議員団）》

復旧・復興へ全議員一丸となって

「全員協議会」で迅速な意思決定



現地調査（平成 23 年 5 月 14 日）

全議員をメンバーとする「東日本大震災塩竈市復興対策調査特別委員会」の立上げと、全員協議会による復旧・復興予算の執行に係る案件への対応。
未曾有の大災害からの早期復旧・復興を現実のものとするため、塩竈市議会では全議員が一丸となって活動しました。

《浦戸・復興事業地区（浦戸地区）》

浦戸の明日

―復旧・復興・未来―

縄文人の生活の痕跡が残る島々で、人々は災害を乗り越え、海に生業を求め、たくましくこの地に生き、何度も繁栄を築き上げてきました。
浦戸地区は、みなとまち塩竈の原点。
その課題は塩竈の課題であり、その明日は塩竈の明日でもあります。



震災後に新設された施設

共同カキ処理場



乾海苔協業化施設

《保健・福祉・ボランティア》

生活とコミュニティの再建

「ボランティア支援と保健・福祉の機能回復

全国各地から駆けつけていただいた延べ8000名のボランティアの方々。温かい支援を受け、市民は生活や地域社会の再建に向けて歩み出しました。そこに欠かせない、「福祉」に関係する公共施設とサービスの復旧・復興は、少子化、高齢化という時代の課題を解決するための取り組みでもありました。



平成25年1月にオープンした新・藤倉児童館



「わせねでや」 100年後もその先も歌い継がれるように

震災直後の桂島の避難所で生まれた一編の詩がありました。
島への思いが込められた、その詩のタイトルは「わせねでや」。
それは、島で生まれ育った内海和江さんが、島を離れていく人々のために贈る言葉として綴ったものでした。



© TBC

《応急仮設住宅・災害公営住宅（本土地区）》

住宅再建の進行

（応急仮設住宅と災害公営住宅の現状）

3月22日時点で指定避難所等に収容されていた避難者は13335人。生活再建の第一歩となる応急仮設住宅、その後の災害公営住宅の完成が急がれました。あれから数年。平成26年2月には待ちに待った災害公営住宅の入居が始まり、復興の力の源となる新たな地域コミュニティも各地に芽生えつつあります。



伊保石災害公営住宅第1期入居式
(平成26年2月1日)



錦町災害公営住宅の鍵引渡式 (平成26年12月26日)

塩竈市災害公営住宅建設事業

—長い間住みなれた土地で、安心した生活をいつまでも—



平成26年夏、浦戸地区の災害公営住宅建設が始動



URとの災害公営住宅建設事業着手式 (平成24年2月1日)

《復興事業地区（本土地区）》

塩竈の未来の都市像を描く

（津波浸水地区の復興に向けて）

天然の良港として古くから知られた「みなとまち塩竈」。時代とともに市街地は海へ延び、平地部分の約60パーセントを占めるまでに。津波によって甚大な被害を受けた市街地の人々が思い描くまちの復興計画は「現地再建」。それは、塩竈の未来の都市像を現実化する歩みに他なりません。



海岸通地区



藤倉地区

港町地区



北浜地区



「長い間住み慣れた土地で、安心した生活をいつまでも送れるように」未来の都市像を現実化する復興事業を進めています。

《「仙台塩釜港」塩釜港区》

再確認された重要性

↳ 国際拠点港湾

「仙台塩釜港」塩釜港区の将来像

奈良時代、国府多賀城の津に始まると伝えられる「塩釜港」。

以来千数百年にわたり、地域に繁栄をもたらし、人々の暮らしを支えてきました。

物流・観光・防災と複数の機能・役割を持つ港は、「地域産業支援港湾」として、

震災後、その重要性をさらに増しています。



震災後初めてのタンカー入港
(平成23年3月21日)



平成24年11月6日に行われた復旧工事推進式



完成が待たれる「魚市場整備事業」のパス



震災後初となる水揚げ(平成23年4月14日)



復興関連事業で水産加工業の復興を支援

《漁業・水産業・水産加工業》

基幹産業の礎づくり

↳ 水産業・水産加工業の復旧・復興

震災後、早期復旧を果たし、

平成23年の水揚げ額約104億円となった

塩竈市魚市場。

高度衛生管理型を柱とした新魚市場整備は、

「塩竈の未来の礎づくり」となる一大事業です。

古くから海とともに暮らし、港とともに発展を

遂げてきた塩竈。

水産業・水産加工業の復旧・復興、さらなる

発展は、多くの市民の願いに違いありません。

仲間がいれば、もっと羽ばたける
—これからの東北のために。

GAMAROCK

震災発生1カ月後。炊き出しと野外ライブが、人々の心に希望の火を灯しました。

「二人でも多くの人に塩竈の魅力を伝え、塩竈の街を元気にしたい」

希望の火は「GAMAROCK FES」となって、今年も塩竈を熱く勇気づけました。



《商工業》

街のにぎわいを取り戻すために

《商工業の復旧・復興

地域資源を活用し、漁業や水産加工業、港湾関連業など、海と人との営みを進化させ、街の基礎となる商工業を育ててきた先人たち。こうした不屈の歩みは私たちの誇りであり、道しるべでもあります。



海岸通地区仮設店舗 「しおがま・みなと復興市場」



平成26年7月1日「塩竈ニコニコ割増商品券」販売開始 (しおがま・まちの駅)



平成23年4月2日に開催された塩竈復興市

《観光》

塩竈の魅力为全国へ

《観光による交流とにぎわいの創出

観光施設の復旧・復興の先陣を切ったのは塩釜水産物仲卸市場。被災市民への食材供給として3月17日に開催した謝恩セールを経て、3月22日には営業を再開。「水産のまち塩竈」の健在振りを示しました。また、4月29日には市内の寿司店の一部が被災を乗り越えて、その動きに続きました。現在は、震災前以上の観光客数を目指し、広域連携やイベントの創出に取り組んでいます。



平成23年の花まつり



平成23年の塩竈みなと祭

復興の先陣を切った塩釜水産物仲卸市場

マリゲート塩釜「復興市」(平成23年5月1日)



《学校》

避難所から授業再開へ

～ 教訓と経験を伝える場として

各校で独自の防災意識啓蒙事業を実施

見えるものが、全て揺れた。机、蛍光灯、教室……。

担任する1年生の子どもを2つある机の1つの下に入れた。

「大丈夫、大丈夫。」

子どもへ掛けた言葉が、震えていたのが自分でもわかった。それでも、声を掛け続けた。

(塩竈市教育委員会「3・11塩竈っ子へ」 月見ヶ丘小学校 小嶋教諭)



防災意識啓蒙事業の積み重ねで
児童・生徒の命を守る



《防災対策》

反省と課題を次の備えに

～ 塩竈市の防災への取組

職員から寄せられた東日本大震災における災害対応の反省と明らかになった課題。

公助の限界と、自助や共助の活躍、

そうした市民・団体との連携の重要性を気付かされました。

次の災害に備えるために教訓を活かすこと。

ソフトとハード両面での、新たな取組を始めました。

被害を最小化する「減災」を基本方針とし、

さまざまな対策を組み合わせて災害に備えます。



平成26年度塩竈市総合防災訓練（6月8日）

未来の子どもたちに震災の記録を伝えて、
尊い命を守りたい

「震災の記録碑」

「この場所まで津波が来たんだよ。信じられる？」

「津波はあの高さまであったんだって」

こんな会話が子どもたちの間で交わされ、

震災が語り継がれることを願い、

地元の青年経済人たちは、

震災を語り継ぐ石碑を平成24年10月、建立しました。



《震災の記憶》

後世への伝承として

～ 「浪分桜」が教えてくれること

平成24年3月11日、京都と塩竈、

桜守「第十六代佐野藤右衛門」氏との縁で

津波の到達地点付近に植樹された「浪分桜」。

津波の記憶、避難することの大切さを後世に伝えます。



<震災の記録碑>除幕式

塩竈市東日本大震災記録誌作成事業 関連ワークショップ

東日本大震災によって、塩竈市は本土地区も浦戸地区も甚大な被害を受け、多くの命と財産が奪われました。

しかし、どんなに被害が甚大でも、時がたつにつれてその記憶は風化していきます。将来ふたたびこの悲しみを繰り返さないために、

震災の記憶は何としても記録に止めておかなければなりません。

この震災記録誌を作成するに当たり、

塩竈市では広く市民の皆さんにも参加を呼び掛けて、

市民の皆さんが大震災で見たこと、記録したことを持ち寄っていただき、

互いにその情報を共有するための「ワークショップ」を開催しました。

その模様を報告します。



第1回

塩竈の津波と復興の歴史にふれる

塩竈市出身で仙台市教育委員会文化財課の木村浩二さんを講師に迎え、塩竈の歴史と過去に塩竈で起きた地震、東日本大震災についてお話しいただきました。

平成26年6月15日「日」 14時30分
～17時／ふれあいエスパ塩竈



第2回

3・11の記憶を写真から呼び起こし、共有、伝承する

震災時の写真を参加者が持ち寄り、どのような状況で写真を撮ったのか、またその時どのような生活だったのか、当時の様子を語り合いました。平成26年6月29日「日」 13時30分～15時30分／ふれあいエスパ塩竈

第3回

復興の歩みを知る、感じる

震災当時を思い出しながらまち歩きをして、現在の状況を撮影しました。撮影の後は将来の塩竈への希望などについて、意見を出し合いました。

平成26年7月12日「土」 13時30分
～16時／壱番館





第2回

3・11の記憶を
写真から呼び起し、
共有、伝承する

3年半が過ぎて
震災を語り合うという意義

ワークショップの第2回目では、参加者の方が撮影した写真を見ながら当時の語り合いました。震災から3年半が過ぎ、記憶は少なからず薄れてきていますが、

写真を通して自らが経験した東日本震災を語り合うことで、皆の記憶を共有し合う貴重な時間となりました。

ファシリテーターを務めた田中聡子さんは塩竈市出身。ご実家は一森山で、現在は仙台市に住み活動しています。

大きな揺れを感じた瞬間、 それぞれの2時46分

はじめに仙台市在住の衛藤雅之さんから自身が撮った写真を解説していただきました。衛藤さんは塩竈に住む同僚の安否を確認するために、3月16日に仙台から国道45号を塩竈へ向かいました。その時初めて津波被害を見て、絶望感を感じたそうです。夕方になってようやく同僚の自宅に到着。建物の破損に驚きながらも大声で呼び掛けると、同僚は中から着の身着のまま出て来て、その姿を見てひと安心した、と当時を振り返ります。

泉ヶ岡にお住まいの末永榮子さんは、発災時、歯の治療中でした。電灯が点滅し、机は右に左に動き、危険を感じたため治療台に必死につきまわり、揺れが収まるのを待っていたそうです。家に逃げ帰り、家屋を確認してから、近所の一人暮らしの方へご主人と一緒に声を掛けて回りました。津波が来ているとは全く知らず、水道が止まるから、とバケツ、ヤカン、

衣装ケースなど、ありとあらゆる入れ物に水を汲み置くことを最優先に行動したそうです。

野田明宏さんは写真が趣味で普段からよく撮影されている方。震災当時はマリネットに向かっていたところ大きな揺れを感じ、直感的に「津波が来る」と感じたそうです。すぐに帰宅したものの家族は不在で連絡が取れず、町内会で集まり情報を受けたり避難を指示されていたそうです。

後楽町にお住まいの土見大介さんはその日仕事が早く終わったため、自宅で昼食後ゆっくりしていたところでした。幸い自宅や近所に大きな被害はなく、友人と「大きかったね」とツイッターで連絡を取り合っていたそうです。雪が降る中、鹽竈神社に行つて初めて津波が来たと聞き、大変なことが起きたと思ったそうです。

高校教師の小川進さんは直後からカメラを手に取り、写真を撮って回りました。塩竈に来る前は気仙沼に15年住んでいたことから津波被害が気掛かりだったのですが、一週間後に通行止めが解除され、やっと行くことができたそうです。

他にも、「夜勤明けで就寝中地震が起きたが、幸い家族全員が在宅だったため安心だった」と、ご夫婦で参加された穴戸勇太さん。小学生の時にチリ地震津波を体験し、津波の恐ろしさを憶えている熊



谷忠昭さん。写真を見ながら状況を聞くことで、当時の記憶が呼び起こされ、「そうだった、あの時こう思つてこう行動したんだった」などと、薄れかけていた記憶を思い出すワークショップになりました。

未来の塩竈に生きる人たちに 自分たちが伝えたいこと

ワークショップの後半では、参加者の方がそれぞれ「未来の塩竈に生きる人たちに伝えたいこと」、もしくは、「今、実行していること、したいこと」、「今、私にできること」を考え、付箋紙に自分の思いを書いてもらいました。

参加者の方が撮られた 3.11の写真



マリゲート塩釜は避難所になり、当初から被災者を受け入れていました。「ゴールデンウィークまでには営業を再開させたい」という気持ちでみんながんばっていました。

(野田明宏さん／平成23年3月16日撮影)



普段はあまり馴染みのない自衛隊の車をあちこちで見かけました。パトカーなども異様に多かったのを覚えています。復旧の車両だけではなく、警備の車も多数巡回していました。

(土見大介さん／平成23年3月14日撮影)



塩釜駅前のヨークベニマル。自宅の周りは大きな被害を受けていなかったが、これを見て初めて、自分自身が被災地にいるんだ、被災者なんだ、ということあらためて実感しました。

(土見大介さん／平成23年3月14日撮影)



国道45号、尾島町付近。これが初めて見た津波です。

5日経っても冠水したままで、道路は通行止め。看板で迂回を呼び掛けていました。

(衛藤雅之さん／平成23年3月16日撮影)



連絡が取れなくなっていた同僚の自宅付近。津波の爪痕がまだそのまま、瓦礫が散乱する中、ドラム缶で火を起こし、暖をとっていました。

(衛藤雅之さん／平成23年3月16日撮影)



安否不明の祖父を探すため、市内の避難所を回っていました。

マリゲート塩釜に寄せる避難者の情報が欲しかったので向かったにもかかわらず、たくさんの物が流れ着き、水に阻まれて近寄れなかったときに撮った1枚です。

(土見大介さん／平成23年3月14日撮影)



乾電池がなくて困っていると聞き、全国の知り合いに呼び掛けました。運送会社はストップしていましたが、唯一郵便局はバイクで配達できるものに限っては届いたため、レターパックに入れてもらい全国から約8,000本集めました。それらを整理し、まとめて浦戸諸島に届けました。

(小川進さん／平成23年4月10日撮影)



1週間後、市営汽船が動き始めたので、物資を持って祖父のいる寒風沢島へ行く途中、桂島での写真。離島は初めは物資も届かなかった。津波前は、集落がごちゃごちゃしている印象があったが、津波被災を目の当たりにして、「閑散としてしまったな」というのが第一印象でした。

(土見大介さん／平成23年3月18日撮影)



マックスバリュに行ったときは雪が降っていました。当時はこのとおりで買い物できる店も少なく、店が営業しているかどうかは人が並んでいるか、並んでいないかで判断していました。「営業中」と大きな紙を貼っていたり、外にテントを張って営業しているお店もありました。

(野田明宏さん／平成23年3月16日撮影)



ワカメが終わり次は昆布だ、という時に被災。湾内の瓦礫、砂、航路で航行を妨げるロープなどを、組合員総出で海から揚げ、岸壁で分類しました。

(佐藤健太郎さん撮影)



釜ヶ淵。島と島の狭い間から津波が押し寄せ、堤防を乗り越えて流れ込み、200艘の船も、棧橋も流されてしまった。

(佐藤健太郎さん／平成23年5月10日撮影)



浦戸諸島に渡る船にはまだ規制があり、乗れるのは島民、親族、災害支援者だけでした。市役所に相談し、物資を届けるため災害支援にもらい、乾電池を届けました。

(小川進さん／平成23年4月10日撮影)



中の島の塩釜郵便局付近。ガレキがそのまま手付かずの状態、車も20日頃まで放置されていました。

(野田明宏さん／平成23年3月17日撮影)



復旧工事が終わり、再開した釜の淵漁港マリーナ。ぜひ皆さんには、復旧された様子を見に来てほしいです。

(佐藤健太郎さん撮影)



運転を再開した仙石線に乗り、1か月半ぶりに塩竈へ。まだ道路に船があったりしたものの、街中は結構片付いていました。イオンの裏に、津波をかぶったはずの桜が咲いていたのが印象的でした。

(衛藤雅之さん／平成23年5月1日撮影)

震災から1か月後、避難所になった野々島の浦戸中学校の体育館です。その後、寒風沢島に渡りました。縛り地蔵は倒れ、東屋も倒壊していました。

(小川進さん／平成23年4月10日撮影)



津波を被って根元から切られた柳の木。芽が出てきたのを見て、「芽が出ているな、すごいな」と、新たに萌えてくる生命力を感じました。

(末永榮子さん／平成23年12月撮影)



参加者の方が語った 震災の教訓

3日は行政に頼らないで
生きられるように準備する
他人を当てにしないで、
自分で考え、確保しておく。

失敗体験

助かったという話ばかりではなく、
失敗体験も後世に残す。どこに
逃げたか危なかった、どこに逃げた
から亡くなってしまった、など様々な
情報を共有する。

避難所でのマナー教育

防災教育はあるが、今後はマナー
教育も必要。
お年寄りから子ども、幼児、いろん
な人が集まる場所でのマナーは、
例え非常時であっても大切。

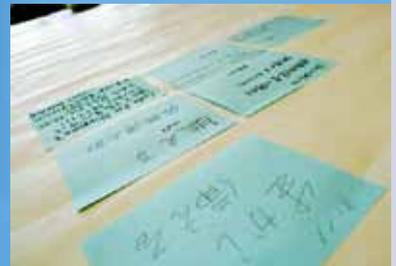
逃げることも、準備も、 自己責任で

何かあったときには誰かを責め
がちだが、あくまで自己責任。
「逃げる」として「戻らない」を
徹底する。塩竈は平地が少な
い。今後は高齢者が逃げられる
形を作っていくかなければならない。

どこに誰が住んでいるか、 ネットワークを作っておく

ひとりでは不安。町と周りの人たち
を知ることが大切。万が一の時
はどこに避難すればいいのか、
把握しておく。

準備と伝えることを
繰り返して、忘れない
本震の時は動けなかったが、
4月7日の余震の時は冷静に
対応できた。
連絡手段を考えておくこと、
自分でできることをすること。



参加者の方からは「揺れが3分弱も続
き、こんなに長い地震は初めてだ」とい
う方や、「建物が横に動き、倒れるかと
思った」といった体験が寄せられました。
津波に関しては「津波が来ても、『堤防を
少し乗り越える程度かな』と思っていた」
という方がいる一方、「マリングート塩釜
に向かっていったが直感的に『津波が来る』
と感じて引き返した。チリ地震津波の時
の光景が頭をよぎった」と真つ先に危機
感を覚えた方もいらっしゃいました。
塩竈市は、港を中心に発達した歴史あ
る市街地と、山を切り開いて作られた新
興住宅地からなります。東日本大震災で
は、岩盤を造成した山側では地震の揺れ
が比較的小さく、埋め立てによって作ら
れた市街地を含む海岸部では、揺れが大
きく感じられました。同じ塩竈市内で揺
れの感覚に差があるというのも、そこに
原因があるのでしょうか。

市民一人ひとりが伝え 震災の教訓を共有化する

今回のワークショップのテーマは、3
11の記憶を写真から呼び起こし、共有、
伝承する。参加者ご自身が撮った震災時
の記録写真をご持参いただき、その写真
を元にどのような状況で写真を撮ったのか、
またその時はどのような生活だったのかを

話していただきました。

ライフラインが復旧する前はどんな生
活を強いられていたのか、家族では何を
話し合ったのか、今どんな備えをしてい
るのか。非日常が日常となった時の「震
災後の生活ぶり」は、映像や写真だけで
は伝わりきれず、体験者の思いが加わる
ことでより理解されやすくなりました。

今回のワークショップのように、それ
らの震災体験として語られた話は、将来
きつと役に立つ資料になるはずですが、東
日本大震災から3年半を振り返りながら、
当時の様子を語り合うこと、そして記憶
の共有化をすることは、市民一人ひとり
が震災を伝えて行くことにつながり、そ
れが塩竈というまちの将来を描いていく
きっかけになっていくことではないで
しょうか。震災を語るの「今さら」な
のではなく、「今から」だということを実
感したワークショップになりました。



第3回

復興の歩みを
知る、感じる

震災当時の写真と見比べ
街なかの変化を見る

第3回目のワークショップのテーマは「3・11のイマを訪ね歩きましょう。」「大学で地域構想を学びたい」という高校生塩竈市内でボランティア活動をする20代の女性、塩竈で生まれ育ち、海苔の養殖に携わってきた80代の男性など、さまざまな世代の方々が、さまざまな思いを胸にご参加くださいました。

ワークショップの前半は、まち歩きをしながら震災直後と比べ変化している様子を自身の目で見て、震災直後に撮られた写真と同アングルで写真を撮って「定点観測」をするフィールドワークを行いました。

「定点観測」は吉番館を出発し、JR仙石線本塩釜駅や「佐浦酒造店」前、マリナーゲート塩釜前など6カ所を巡りました。撮影ポイントに到着すると当時を思い出させることも多く、参加者の方々は撮影しながらも震災当時の様子について口々に語り合いました。



本塩釜駅付近(村上ゆかりさん/平成23年3月18日撮影)



塩竈市本町(笠原真里子さん/平成23年3月14日撮影)



(平成26年7月現在)



(平成26年7月現在)

発災から一週間後、吉番館のすぐ近くで店頭でテーブルを出して営業する八百屋さん。並ぶ人々は長靴を履いており、塩竈の街なか海水や泥に覆われていることがうかがえます。ご自身も被災しながら、食料品を売ってくれるお店は大変有り難かったと思った市民も多かったのではないのでしょうか。今では、津波の痕跡もありません。

3月14日に撮影された塩竈市本町の「佐浦酒造店」界隈で、ワークショップ参加者が撮影した写真。海岸への道路が通行できず、車両が手前で迂回していることが、路上に残るタイヤの跡からも分かります。今歩いてみると、ここまで津波が来たという跡はほとんど見つけることができませんでした。



歩いて見えてきたもの、
将来への思い

この日は真夏日。炎天下を1時間歩き回るフィールドワークの後、再び吉番館に戻り、実際に歩いてみるの感想や、以前の塩竈よりもよいまちになるために何が必要なのか、市民の皆さんが目で見えて感じた意見を自由に語り合っていました。



JR仙石線本塩釜駅前(平間眞一さん／平成23年3月14日撮影)



海岸通(津川登昭さん／平成23年3月12日撮影)



(平成26年7月現在)



(平成26年7月現在)

JR仙石線本塩釜駅を背に撮影された駅前の様子です。被災車両が路上にそのまま残され手つかずの様子が分かります。その後、駅前にあった白い建物は解体されました。「ビルが解体された時は、とても違和感を覚えたのに、だんだん風景が見慣れてしまうと分からない」と語る参加者も。

震災翌日の塩竈一番の繁華街、海岸通の様子です。道路は黒い泥に覆われ、中央部で自転車を引く人物が写っています。周辺は汚泥が残り異臭も立ち込めていました。現在では、アーケードは撤去され、多くの商店も解体され更地になっていました。

記憶を記録し、震災を後世に残すために

フィールドワークで、「アーケードや建物が無くなると街の印象がガラリと変わる。解体されてしまうと、元々そこに何があったのかが思い出せない」という参加者の声がありました。意識をしないと記憶は書き忘れてしまい、日々の記憶は残りにくいのです。

記憶を記録する、震災を後世に残す。そのためには私たち市民は何をすべきなのかを考えさせられる、大切な気づきだったのではないのでしょうか。

3回のワークショップを通し、古地図や書物、地層から分かる塩竈の歴史を知り、そして未曾有の大震災を体験した私たちだからこそ、語り合い、その想いを後世に教訓として残さなければならぬ、という思いを強く持ちました。

日々変わりゆくまちと人。東日本大震災はまだ終わったものではなく、現在進行形です。塩竈の長い歴史の一コマとして今回の震災は記録されていくことでしょう。塩竈というまちと震災を記録し続けることができるのが塩竈市民。開催されたワークショップがそのきっかけになることを願います。



参加者が語った それぞれの声

商店街を思い出しながら歩いてみたが、お店が一つなくなると、雰囲気ががらりと変わってしまい、思い出すのも難しくなる。

旧亀井邸など、昔の塩竈を感じられる場所を残していれば、どんなに周辺のまちが変わっても、塩竈の歴史と災害記憶を後世に伝えられるのではないかな。

便利さゆえに、多くの人々がまた被害があった場所に帰り、繰り返してしまうという繰り返す歴史を知った。自分の代だけでなく、孫、末代までを考えれば市民一人ひとりが語り続ける努力を怠らないことが大切だと思う。

復興が進むのはもちろん良いことだが、町中が変わっていくからわからなくなってくる。例えば昭和初期の建物などは残す方向で進めないと、元々塩竈という町はどのようなまちだったかを伝える必要がある。

3年半で町はここまで変わったが、これからもどんどん変わっていく。何か目安になるものがあるれば思い出しやすい。

塩竈は千代地震の後に街が大きく変わった、という印象がある。この震災を経て、もう一度変える必要があるのではないかな。

今日まち歩きをしてみて、仮設商店街以外に地震の後でできたものや痕跡などはほとんどなかった。徐々に復興しているのを感じる。どんん記憶が薄れているのを感じる。

塩竈で働き始めたのは最近なので、どこが埋め立てをされているかがわからなかったが、今回の津波で、埋め立てられたところが浸水していることが分かった。

塩竈は、地震に限らず、歴史上災害を繰り返し経験している。災害に遭い、それを踏まえて災害に備える。次の災害が起きて、また備える。その経験や知見をきちんと伝えるべき。



塩竈にはおもしろいものがたくさんあるにもかかわらず、地元の人も知らないし、外部に発信もうまくできていないのが残念。
発信の仕方を考えたい。

壊され失ってしまうことは嫌だが、一方で変わっていくのも楽しみながら、話したいと思った。



東日本大震災の反省と明らかとなった課題

震災後、市職員を対象にアンケート調査を実施し、その結果から検証を行い、「塩竈市地域防災計画」の改訂版に反映させました。

項目	課題・問題点
1 被害想定	・宮城県沖地震（運動型）を第三次地震被害想定としていたが、想定以上の地震と津波が発生した。
2 連絡、通信手段の確保	・固定電話、携帯電話が不通になり、指定避難所や防災関係機関の連絡に支障が生じた。 ・浦戸地区との連絡手段が確保できなかった。 ・防災行政無線が聞き取りにくい地域があった。 ・沿岸部の防災行政無線（同報系）が津波により被災した。
3 自助、共助、公助の連携の推進	・大規模災害時において、市や消防などの公的機関の災害応急対策には限界があることから、自助、共助との連携が必要。 ・自助、共助、公助のそれぞれの平常時、災害発生時等で行うべき責任ある取組の確認。
4 津波対策	・宮城県沖地震を想定していたが、今時津波を踏まえた避難区域等の見直しが必要。 ・同報系防災無線から避難指示を行ったが、津波襲来など被災現況を放送することができなかった。 ・一旦避難したものの、再度帰宅した市民が津波で被災し亡くなっている。 ・津波一時避難ビルへの避難者が、冠水により長時間にわたり孤立した。 ・津波から生命を守る可能性の高い手段を、地域内に少しでも多く確保することが必要であることから、新たな津波一時避難ビルの確保。 ・今後、宮城県が公表する津波浸水想定に基づき、被害想定の見直しが必要。
5 避難路の確保	・避難路については、平成24年3月に県が制定した「津波避難のための施設整備指針」に基づき整備を行う。
6 避難所の運営	・14カ所を指定避難所とし、4,200人を収容可能としていたが、最大で、集会所などの避難所を含め42カ所で約8,700人の避難があったことから、指定避難場所の拡充が必要。 ・避難所は住民主体となった運営に移行するようになっていたが、円滑にできない避難所があった。 ・女性のプライバシー確保や災害弱者のベッドの使用等、避難場所内で配慮が必要。 ・ペット帯同避難者はペット同室の希望が多かった。 ・避難所運営については、教職員の連携を更に強めていく必要。
7 自主防災組織の育成、強化	・自主防災組織により、自主的に炊き出しや、避難所の運営などが行われたことから、より一層の組織強化が必要。
8 防災拠点等の整備	・指定避難所で使い捨ての非常用トイレを備蓄していたが、後始末や衛生的な問題から、プールの水などを運搬し水洗トイレの使用の要望が多かった。また、非常用発電機の台数が不足した。 ・多数の市民が集会所へ避難したことで、発電機等の防災資機材が不足し、防災資機材の整備要望が多かった。 ・浸水被災地域の市民を他地区の非浸水区域の集会所で受け入れた事例が多数散見された。市全域に防災拠点の配置を的確に行い、被災地区を市域全体でカバーすることが重要。
9 相互応援協定	・県内広域にわたり災害が発生したため、協定通り円滑に行われなかった。
10 食料、生活用品の供給対策	・第三次想定避難者数3,200名を基本に備蓄していたが、大幅に上回る避難者が発生し、非常食糧や毛布が不足した。 ・停電により非常用発電機が必要になったが、台数、燃料も不足した。 ・非常食糧を中心に備蓄していたが、高齢者や子供、女性、乳児の生活用品の要望が多かった。 ・在宅避難者への支援の方法。
11 災害時要援護者の対策	・自主防災組織や町内会から要援護者の避難活動を行うため情報提供の要望があったが、個人情報保護のため対象者の情報がスムーズに提供できなかった。 ・民生委員だけでは、要援護者の安否確認や避難誘導が難しいので人的支援が課題。 ・土地勘に不案内な観光客への避難誘導は、避難広報や避難看板を中心に行っていたが、円滑な避難を行う上で、更なる対策が必要。
12 災害時の広報体制	・災害初動時にサーバーのダウンにより、ホームページの公開が停止したことで、最新情報を伝達できなかった。
13 避難方法の徹底	・自動車での避難が多数あり、渋滞や避難所付近の道路、避難所の校庭が混雑した。
14 燃料の不足	・ガソリン等燃料の供給が長期間にわたり停止し、災害対応や市民生活に支障。 ・燃料の災害時協定が履行不能になり、有効な協定が必要。 ・災害が広範囲であったため協定先も被災したことで燃料不足となった。
15 市及び災対各班の対応	・想定を超えた災害であり、災対各部の災害対応マニュアルの見直しが必要。 ・災害時においても継続する必要がある重要業務の計画の策定。
16 消防団活動	・消防団員が活動中に津波で被災する事例が多数報告されたことから、安全に活動を行うマニュアルの整備が必要。 ・津波対策に対応しての救助具等が配備されていなかった。
17 震災教訓の継承	・震災で甚大な被害を被ったが、貴重な経験や教訓を記録をとどめ今後、震災を体験していない次世代の子供たちや、各方面に広く伝えていく取組が必要。
18 防災教育の充実	・防災教育により避難誘導が円滑に行われた地域があったことから、危険回避能力を高めるより充実した防災教育に力を入れる必要がある。 ・児童生徒の災害への自主的取組（ボランティア等）の推奨。
19 震災予防対策	・一部の庁舎が津波で被災し、業務が継続不能になった。
20 浦戸地区対策	・津波で長期間孤立するなど、離島としての地域性を踏まえた、防災対策が必要。
21 放射能事故対策	・原子力委員会の設置により法定化される「原子力災害対策指針」により、地域防災計画の策定が必要。 ・東京電力福島第一原子力発電所事故では、放射線に対する不安、水産業や観光業などに対する風評被害など放射能問題で市民生活に多大な影響が生じることからきめ細やかな対応が必要。

防災・減災力の強化 ー震災後約4年の成果ー

「長い間住み慣れた土地で、安心した生活をいつまでも送れるように」。塩竈市では、これからも防災・減災力の強化に取り組みます。

■防災の強化（震災前と震災後の比較）

		震災前	震災後	備考	
防災行政無線 (同報系)	方式	アナログ	デジタル		
	子局数	73局	78局		
	バッテリー時間	48時間	120時間	子局	
	可搬型親局装置	—	○	非常時、親局以外でも放送可	
	津波監視カメラ	—	2台	本土、野々島	
	戸別受信器	—	48台	市施設、駅等の集客施設	
	電話自動応答装置	—	6回線	022-364-1260	
	モーターサイレン	—	9カ所	沿岸部	
	パトライト	—	11カ所	沿岸部	
防災行政無線 (移動系)	子局数	46台	113台	防水型	
通信ツール	衛星携帯電話	—	2台	本土、野々島	
	PHS電話	—	42台	各部、各学校	
情報の提供方法	Jアラート	—	○		
	コミュニティFM	手動放送	自動放送	行政無線割込放送	
	CATV	手動放送	手動放送	テロップ放送	
	エリアメール	—	○	docomo、au、SoftBank	
情報の受信方法	地震津波警報器（自動起動）	—	132台	緊急地震速報専用	
	防災ラジオ（自動起動）	—	○	避難行動要支援者対象	
指定避難所	指定避難所数	14カ所	20カ所		
	指定避難所の収容可能人数	4,200人	8,771人		
	主な装備品の拡充	飲料水	3,748.0人／1日	8,771人／2日	
		食料品等	4,600.0人／1日	8,771人／2日	
	女性用控室	—	○		
	災害弱者一時専用室	—	○		
	ペット対応場所	—	○		
	災害用トイレ設置	—	6カ所		
PHS電話	—	12台			
	Wi-Fi	—	11カ所		
避難対策	津波避難ビル数	4カ所	5カ所		
	地震・津波避難ルートの設定	—	17路線		
津波防災拠点施設等	津波防災拠点施設	—	6カ所	本土2、浦戸4	
	防災公園	—	1カ所	清水沢公園	
自主防災組織	自主防災組織数	59団体	76団体		
	自主防災組織支援事業	—	○	平成24、25、26の3カ年	
町内会関連	防災研修会	○	○	震災経験を教訓に資料を改訂	
	集会所防災設備整備	—	48カ所	発電機、ライト等	
防災訓練	総合防災訓練	1学校区単位	全市域		
	災害協定自治体との通信訓練	—	2回／年	4自治体	
	浦戸小中学校通信訓練	—	1回／年		
	Jアラート受信訓練	—	1回／年	全国瞬時警報システム(Jアラート) 全国一斉情報伝達訓練	
災害協定	締結数	28件	40件		
消防団	資機材整備	救命胴衣	—	20着	
		浮き輪	—	4個	
	災害用ボート	—	4艇	8人乗り、3人乗り	
	トランシーバー	—	50台		
	救助資機材搭載型車両	1台	2台		
その他	防寒着等	—	全消防団員分	編上げゴム長、安全ベスト、ヘッドランプ	

※震災後は平成26年12月末現在

「塩竈市地域防災計画」の改訂

震災の経験と教訓を次の災害への確かな備えに



「塩竈市地域防災計画」(改訂版)の基本理念

「自らの命、安全・財産を自ら守る」「自助」、地域の安全等を自分たちで守る「共助」、そして行政等が行う「公助」を基本とし、それぞれの責務・役割そして連携を明確にしなが、誰もが安全で安心な生活がいつまでも送れる地域社会の構築を基本理念とする。



あらゆる災害に対応できる地域防災計画へ

「塩竈市地域防災計画」は、災害対策基本法(昭和36年法律第223号)第42条の規定に基づき、塩竈市防災会議が市域の災害対策全般に関して、塩竈市が処理すべき事務または業務を定める計画です。災害による市民の生命、身体及び財産への被害を可能な限り軽減することを目的

とし、災害を防ぐために平常時から行う予防対策や、災害発生時の応急対策、さらには復旧・復興期において実施すべき対応などを定めています。

市では、平成20年1月に策定した計画を国・県の上位計画の見直しや東日本大震災による想定を超えた津波浸水区域や避難者、女性や避難行動要支援者の対策など、本震災の課題を踏まえた地域防災計画の抜本的な見直しを図るため、平成25年1月から7回にわたり塩竈市防災会議において議論を重ね、平成26年3月新しい「塩竈市地域防災計画」に改訂しました。

改訂では、従来の地震と津波を想定した「震災対策編」を「地震災害対策編」「津波災害対策編」の2編に分割。近年の異常気象による風水害の多発から「風水害等災害対策編」、さらに原子力発電所事故も想定し「原子力等災害対策編」を新設し、あらゆる災害に対応できる計画としました。

塩竈市地域防災計画は、市のホームページで公開しています。

■塩竈市防災会議とは

災害対策基本法第16条第6項に基づき、本市防災の基本計画である地域防災計画の作成及び実施の推進などのために設置された組織です。市長を会長とし、指定地方行政機関、陸上自衛隊、宮城県職員、指定(地方)公共機関、本市教育長、消防事務組合長・消防団長、本市職員、自主防災組織や学識経験者、ボランティア、

NPO、女性、高齢障害者の団体、防災見識者等により構成されます。

■「塩竈市地域防災計画」の主な改訂内容

◎避難対策

東日本大震災避難人数に対応、避難所運営などの見直し

・避難者収容人数（4200人→8771人）

・指定避難所（14カ所→20カ所）
・高齢者、障がい者、女性等専用スペースの確保

◎情報通信網の充実

情報伝達ルートの多様化、多重化
・防災無線、地元FMラジオ放送、緊急速報メールなど
・放送施設停電時自動起動装置、屋外子局120時間対応

◎食料・飲料水対策

各家庭における備蓄、給水ポイントの新設
・3日分の食料・飲料水の確保
・常備菜などの必需品は各自で用意
・給水ポイントを設置（0→18カ所）

◎避難行動要支援者

避難行動要支援者避難支援プランの策定
・避難行動要支援者の登録、所在把握、開示
・避難行動要支援者自らの積極的な登録

■避難勧告等発令基準と市民の行動（抜粋）

区分	地震	津波	大雨	区分	原子力
避難指示	発令基準 ・特別警報（震度6弱の緊急地震速報）が発表されたとき	・大津波警報(特別警報)が発表されたとき	・特別警報が発表されたとき	避難指示	発令基準 ・避難指示等については、内閣総理大臣が市長に指示したとき
	市民等の主な行動 ・机の下等安全な場所へ避難 ・避難のいとまがない場合は生命を守る最低限の行動を開始	・速やかな避難行動に移る ・避難のいとまがない場合は高い所等避難し、生命を守る最低限の行動を開始	・速やかな避難行動に移る ・避難のいとまがない場合は生命を守る最低限の行動を開始		市民等の主な行動 ・塩竈市区域（影響区域）外へ退避
避難勧告	発令基準 ・地震により、大規模火災など複合した災害が発生し、重大な被害の恐れがあるとき	・津波警報が発表されたとき ・津波注意報が発表され、津波到達予想時間に津波高が1mを超える潮位が想定されるとき	・特別警報の予告情報が発表されたとき	屋内退避Ⅰ	発令基準 ・避難指示等については、内閣総理大臣が市長に指示
	市民等の主な行動 ・情報収集を行い、指定された避難所に限らず、安全な場所へ避難	・指定避難所へ ・緊急の場合、近くの高い建物等へ避難	・指定避難所へ ・屋外移動が危険な時は自宅の安全な場所へ移動 ・緊急時は堅牢な建物等、安全な場所へ避難		市民等の主な行動 ・屋内避難 ・建物の気密性を高めるため目張り等の防護策を講じる
注意喚起情報	発令基準 ・震度5弱以上の地震が発生したとき	・津波注意報が発表されたとき	・大雨警報発表が発表され、1時間後に1.5mm以上の降雨が予想されたとき ・大型の台風最接近の3時間前で、被害発生の恐れがあるとき	屋内退避Ⅱ	発令基準 ・放出された放射性物資を含む大気（プルーム）が通過のとき
	市民等の主な行動 ・机の下等安全な場所へ避難	・直ちに沿岸部から避難	・家族との連絡、非常持ち出し品の用意等、避難準備を講じる		市民等の主な行動 ・屋内避難 ・建物の気密性を高めるため目張り等の防護策を講じる

3・11 現在・未来

3・11 14・46

東日本大震災が発生したのは、ちょうど幹部職員をメンバーとする月例の会議を開催している時でした。

「庁内にはスチール製のロッカーが多い。地震の際に崩れないよう整理整頓を心掛け、市民はもとより職員の安全確保にも気を配るように」。偶然にも私がそう話している最中でした。

立ってられないほどの激しい揺れの中、出席していた幹部職員たちは出口を確保しようとドアを開けたり、落下物や窓ガラスに注意するよう呼び掛け合ったり、机を押さえたりと、それぞれ冷静に行動していました。突如の事態にも慌てたり取り乱したりすることなく対処する姿に、「職員は皆、常日頃から災害に備える心構えができています」と実感しました。

そして幹部職員が揃っていたその場で即座に「災害対策本部」を立ち上げました。

「1時間以内に情報を把握して、17時からの本部会議で報告すること」——これが最初の指示でした。

塩竈市長 佐藤 昭

支援への感謝

未曾有の自然災害から4年となります。

この間、人命救助、道路や海上の啓開、生活支援、業務支援、物資提供、激励と、物心両面にわたって、塩竈市はさまざまな方面から手を差し伸べていただきました。

国内はもとより海外在住の方々、自衛隊や消防、警察、海上保安本部ほか関係機関、災害時相互支援協定を締結している自治体をはじめとする公共団体など、本当に多くの方々からご支援をいただきました。

そして、現在も全国の自治体から職員の派遣を受け、復旧復興に係る業務で力を発揮していただいています。

こうしたご支援の数々に、言葉で言い表せないほど感謝しています。

新たな誓い

私は宮城県に奉職中、土木技術者として各地の防波堤や防潮堤の整備に長らく携わりました。明治三陸地震の津波や昭和35年のチリ地震など過去のデータに基づいてそれらを設計し、住民の方々への説明会では防御力は万全であると訴えました。当時は「これで地域と人々を守る」と信じて疑いませんでした。

しかし、大震災の大津波は事前の想定を超える規模で襲い、地域と暮らしを破壊し、尊い命を奪いました。手掛けた防波堤や防潮堤が一定の効果を発揮したことは事実なのですが…。震災後、「自然災害は構造物で克服できる」との考えは驕りではないかと、自らに問い掛けました。そして、「構造物による災害対策には限界があることを生涯忘れまい」と、誓いを新たにしました。

命を守る一助に

この『塩竈市東日本大震災 復旧・復興の記録』は、市民や市職員、関係された方々の記憶を風化させることなく後世へ伝えるための被害と復旧・復興の記録です。

掲載されている事柄、話題の一つひとつが、防災・減災への意識と備えの大切さを忘れないための「知恵」となって、次の災害が発生した際に一人でも多くの方々の命を守ってくれることを願っています。

市民の方々へ

塩竈は古くから海や港とともにあり、多くの先人がそこに生業を求めて暮らしてきたまちです。『塩竈市復興計画』でも、「長い間住み慣れた土地で、安心した生活をいつまでも送れるように」と謳い、現地再建を基本としました。その一方で、今後、再び大津波などの自然災害に襲われることがあるかも知れません。

市民の皆さんにご理解いただきたいのは、「防潮堤などによる防御には限界がある」ということです。「メートルの防潮堤があるから大丈夫」といった過信は禁物です。

何よりも優先されるべき行動は「避難」すること、それを胸にしっかりと刻んでいただきたいと思えます。



平成23年3月16日、浦戸中学校・浦戸第二小学校避難所にて震災後初めて自衛隊のヘリにより浦戸に渡った市長が、帰省中に被災した赤ちゃんを抱きあげた